

レコード芸術10

OCTOBER
2010

[今月のアーティスト]
ヴァディム・レーピン

Vadim Repin

特集

現代の名録音 1980~2010

デジタル録音編

~「音がいい!」が時代を動かす

[インタビュー]

上岡敏之 / 辻井伸行 / ティル・フェルナー / グザヴィエ・ド・メストル / ピアノデュオ・ドウオール

[現代名盤鑑定団] チャイコフスキー:交響曲第4番

[特別企画] ヴァイオリンの典義~ジュール・ブーシュリ回想録

[好評連載]

シューマンと行く ウィーンはウィーン(前田昭雄) / ディスグ散歩人(長木誠司) / 楽に寄す(宇野功芳) / ムーサの贈り物(喜多尾道冬)

海外盤REVIEW



Interview

緻密な技巧で瑞々しくひらかれる
ピアノ・デュオの豊饒な音風景

ピアノ・デュオ ドウウォール

「ピアノ・デュオ」

まきで・文一 山野雄大
写真 山本博道

ピアノ・デュオのエネルギーが溢れた一枚が登場だ。——ドイツ・マンハイム音楽大学大学院で学んだ藤井隆史と白水芳枝のふたりが2004年に結成した「ピアノ・デュオ・ドウウォール」。フランス語の「ふたり(ドウ)」とヘブライ語の「光(オール)」を連ねた造語を冠して活躍。ルトスワフスキやラヴェルなど覇気も呼吸も見事な「デビュー盤『ドウウォール』(09年)」は本誌特選盤に。そして2枚目は……ブラームスの交響曲第一番・連弾版だ。かつてデュオ・クロムランク盤がその魅力を拓いたヴァージョンが、若きデュオによって瑞々しく蘇る。

交響曲をピアノ曲として弾く

なにしろ明るいお喋りの間合いと掛け合いが絶妙なふたり。ごちそうさまな仲の良さだが、相違を越えてひとつの世界を生むゆえなデュオも、ブラームス自編の連弾版交響曲には苦戦したようだ。

「お話をいただいたとき、無理ーって思いましたよ」と藤井隆史は朗らかに振り返る。「ところが彼女は「やりますやりますー」ってすぐ飛びついてた(笑)」

「すぐ演奏会の構成まで考えだして」と憤で思い出し笑いの白水芳枝。ところが始めてみると、試行錯誤の連続だった。

藤井「第2ピアノの冒頭なんて低音の連打だけですから、ひとりりで練習していても分からない。合わせても、彼女の右手があたかも自分の右手であるかのようにイメージしながら内声をこのバランスで……と調整していくのが難しいんです」

白水「第3楽章冒頭も、私は主題をレガートで弾きたいのに、彼はピッツツイカート音程を弾いている。でも連弾って1台のピアノにペダルはひとつだけ(笑)」

作曲家の発想をはかりつつ、肘と指の譲り合いまで計算しなければならぬ。

藤井「アイ・コンタクトもできず、呼吸と指が落ちるタイミングで合わせてゆくと、この制約のなかでどう響かせるか……」

白水「第3楽章冒頭も、私は主題をレガートで弾きたいのに、彼はピッツツイカート音程を弾いている。でも連弾って1台のピアノにペダルはひとつだけ(笑)」

作曲家の発想をはかりつつ、肘と指の譲り合いまで計算しなければならぬ。

藤井「アイ・コンタクトもできず、呼吸と指が落ちるタイミングで合わせてゆくと、この制約のなかでどう響かせるか……」

白水「第3楽章冒頭も、私は主題をレガートで弾きたいのに、彼はピッツツイカート音程を弾いている。でも連弾って1台のピアノにペダルはひとつだけ(笑)」

作曲家の発想をはかりつつ、肘と指の譲り合いまで計算しなければならぬ。

藤井「アイ・コンタクトもできず、呼吸と指が落ちるタイミングで合わせてゆくと、この制約のなかでどう響かせるか……」



音楽の色をつかむ

オーケストラの響きを意識するほど、近付けないと少しに悩んだと言います。

藤井「第2ピアノはトレモロが多くて、旋律に合わせて弾くのがまた難しい」

白水「もう少し静かに弾いてーと思っても、トレモロの存在感は大事です」

藤井「オーケストラの場合には自然なテンポでも、ヴィブラートもできず音は減衰するばかりのピアノでは、そのテンポが表現に合わなかったりするんですよ」

白水「もう少し静かに弾いてーと思っても、トレモロの存在感は大事です」

暗中模索のふたりはふと、オーケストラの模倣から離れよう、と思いたつ。

白水「ひとつのピアノ作品として曲づくりをしてみよう、と」

藤井「ブラームスがこの曲を書いた頃、この連弾版による演奏だけで聴き、オーケストラ版は一生聴くことがなかった人もいたと思うんです。もし、その人に聴いてもらうとしたらどうだろうかと」

ふたりはよほど複雑な現代作品でない限り暗譜で弾くそうだが、ブラームスも「それまでは楽譜を置いて弾いていたん



ブラームス：大学祝典序曲、交響曲第1番（作曲者による4手連弾版）
〈録音：2009年12月〉
[Studio N.A.T@NAT09501]



Deu'or
[ルツワフスキ：パガニーニの主題による変奏曲、ラヴェル：スペイン狂詩曲、シューベルト：幻想曲、ラヴェル：ラ・ヴァルス]
〈録音：2008年4月〉
[Studio N.A.T@NAT08401]

ですが、ぜんぶ暗譜して連弾のソナタのように弾いてみた。そうしたら、ようやく音楽が流れてきたんです」と白水は嬉しそうに振り返る。「暗譜で弾くと景色が広がってきますよね。お互いをさらに聴くようになって……音楽の色が突然みえてきたんです。しかも2台ピアノだとやはり、それぞれ、なんですけど、連弾版で音楽が流れ出したとき、自分が何かの「一部」であると感じられたんです。そこで初めてアンサンブルになった。かくして、ふたりがつかんだブラームスの交響曲第1番は録音完了。やはり自編による《大学祝典序曲》連弾版とあわせてセカンド・アルバムとなった。

制限と束縛から離れたふたりの世界、苦悶したポイントをどうクリアしたかは実際にお聴きいただきたい。なるほど、音楽のなかへ呼吸あわせて自在に（「しっかり」と）ひらかれたその音風景には、ピアノ連弾としての豊饒が広がる。

藤井「オーケストラだと、聴こえない音

もふっと聴こえたりするでしょう？」
しかしそこには、まきれもなくブラームスのあの歌と響き……。

**ブラームス、
そしてドビュッシーへ**

「私たちもふっと奔放さや自由さを身につけたら違う味も出てくるかな」と白水も言うあたり、本誌発売直後のリサイタルで、



Pianoduo Deu'or

藤井隆史と白水芳枝の2人が2004年ドイツで結成。ピアノ・デュオを中心に国内外で活躍している。藤井は東京藝術大学卒業、同大学院修了。植田克己、クラウス・シルデ両氏に師事。東京藝術大学および武蔵野音楽大学非常勤講師。白水は東京藝術大学卒業。笠間春子、井内澄子両氏に師事。国立音楽大学および共立女子大学非常勤講師。藤井、白水ともにマンハイム音楽大学大学院でR.ベンツ、P.ダン両氏に師事、ソロおよびピアノ・デュオ科を最優秀修了。これまで、シューベルト国際ピアノ・デュオ・コンクール第3位、ロンドン国際音楽コンクール第2位（最高位）、青山音楽賞バロックザール賞などを受賞している。

ルで、アルバムでの正確な表現から踏み出したライブ感も聴かせてくれようか。
白水「いま準備で苦労しているのは、ドビュッシー自編の2台ピアノ版《牧神の午後への前奏曲》。今度私が第2ピアノですとトレモロ（笑）。これもメロディへの絡ませかたが分かって音がうまく混ざってくると本当に嬉しい」
それにしても、ふたりに膨大なやりと



■Information

ピアノデュオ ドゥオール・リサイタル2010
◎9月25日（土）17:00 青山音楽記念館/ロックザール
◎10月7日（木）19:00 津田ホール
ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲（作曲者による2台ピアノ版）、リスト：《ドン・ジョヴァンニ》の回想、ブラームス：交響曲第1番（作曲者による4手連弾版）
問い合わせ＝ミリオンコンサート協会TEL03-3501-5638、青山音楽記念館TEL075-393-0011（京都公演のみ）

りを経て音楽を創りあげてゆく日々、はたからはじつに愉しそうに見えるのだが、
藤井「いや、こんなしんどいことややってたらぼくっていくと思うときがあるんですけど（笑）、ここまでやらなければいけないのであるから、やるんです」
並ぶ笑顔も美しき哉。

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

準

2004年にお互いの留学先ドイツで結成、高い技術をもたえたピアノ・デュオとして活動をつづける、藤井隆史 & 白水芳枝の「ドゥオール」。当ディスクは、先年のデビュー盤につづくものだが、2作目にして、2人はかなり思いきった趣向を打ち出してきた。すなわち、ブラームスの交響曲第1番を、4手連弾により演奏しようというのである。まず手始めにやはり4手用にアレンジされた《大学祝典序曲》を奏し、引きつづき、おもむろに始めるのが件のシンフォニーの第1楽章。当然のことながら、旋律がどうしても点描的になってしまいうピアノでオーケストラ同様の効果を出すのは至難、というわけだ。「ドゥオール」はあえてオリジナルにこだわらず、楽曲全体をむしろ、ピアノ曲に見立てたアプローチを取っているようである。つまり、オーケストラ・スコアに描かれた楽器法、諸楽器それぞれの音色といったことにはあえてこだわらず、ピアノに還元された音符を原点としてそれから演奏を組立てていくこと。幸いなことに、この曲にはブラームス自身が書き残したピアノ4手用の譜面が残されていた。これがあれば、少なくとも、ブラームスの意向から外れたことはせずに済む。とりわけ静かに紡がれていく第2楽章アンダンテや終楽章の導入部アタージュにおいて、「ドゥオール」は音楽の心をよくつかんでいるように思われた。より動的な部分も、もとより、それなりに興味深く聴いた。一聴の価値、十分のディスクである。

神崎一雄 ● Kazuo Kanzaki

【録音評】いくぶん大きめのピアノの音像イメージが、デュオ演奏を近めにも座して聴くイメージを近めた収録によって、音域や音の厚み、演奏の捉えのりや、曲のモディファイするに連弾によって広がった活気や躍動感、その表現の広がり、曲の弾きやすさ、音色の安定感、
(90~93)



■ブラームス：大学祝典序曲／交響曲第1番（以上、4手ピアノ版）

ピアノ・デュオ・ドゥオール
[Studio N.A.T.©NAT09501]
¥2800

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

推薦

こちらも結成して6年目という比較的若いデュオだが、ルトスワフスキの《バガニニの主題による変奏曲》（2台ピアノ）やラヴェルの《スペイン狂詩曲》（4手）、《ラ・ヴァルス》（2台ピアノ）などフランス音楽を中心とした前作が、今回のピアノ・デュオのアルバムの中では群を抜く面白さだった。演奏技術的にすばらしいし、なによりも個性的で創造性がある。今回は極めてドイツ的なブラームスの管弦楽曲でいずれも作曲家自身の編曲である。《大学祝典序曲》は冒頭から面白い。実際のオーケストラの音色を彷彿させるだけでなく、全曲の構成が明快で色彩と情感が合致している。前作の《ラ・ヴァルス》で立体的なテクスチャとシンフォニックかつ壮麗なダイナミズムに感銘を受けたが、それはこの曲にもいえる。冒頭の威風堂々とした行進曲風のリズムと柔らかな主題の対比が見事だし、重厚な音色も作品にふさわしい。ピアノを得意とし、しばしば親しい人たちと連弾を楽しんだブラームス自身による編曲だけに、管弦楽の代用ではなく、音楽的に完成されていて、管弦楽のイメージを内包した独自の魅力を持っているが、彼らの演奏はそれを十分に引き出して楽しませてくれる。交響曲第1番も同様だ。シンフォニックなサウンドの作り方やデュオの音色や色彩のグラデーション、静と動や明暗のコントラスト、明快で安定した構成、よく考えられ、吟味されたフレーズやアーティキュレーションなど見事というほかない。